桜村処女会退会員寄贈の茶道具

1999 年 12 月 10 日　初版

2014 年 1 月 14 日　改訂　　永瀧洋子記

1999年9月、茶道用の短冊箪笥(たんざくたんす)が、桜地区市民センターの倉庫で職員によって偶然発見されました。箪笥の中には、棗(なつめ)、茶杓(ちゃしゃく)、茶筅(ちゃせん)、柄杓(ひしゃく)が各一個づつ収納され、箪笥の墨書文字から「桜村処女会」に関する新たな側面を窺い知ることができました。

Ⅰ　短冊箪笥の写真

資料－1　（桜村処女会の短冊箪笥と茶道具）

短冊箪笥蓋表「抹茶器一式　櫻村處女會」

資料―2　（短冊箪笥の蓋裏）

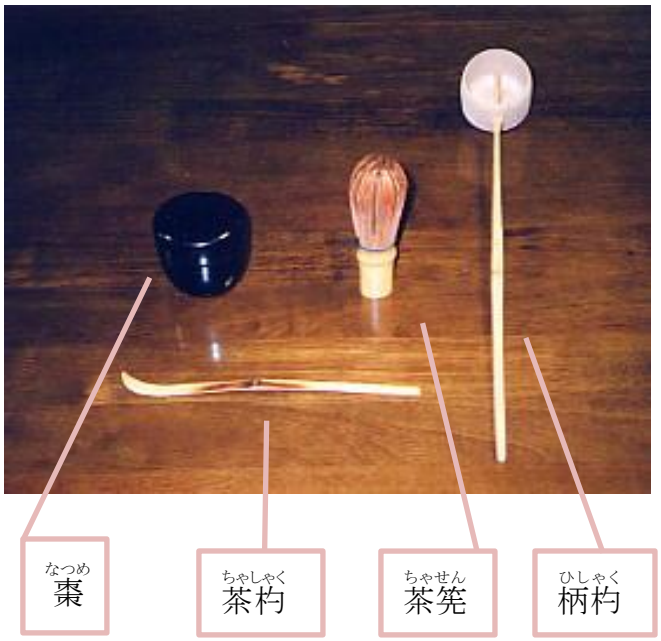
資料－3　（短冊箪笥・背面）

大正拾五(紀元二五八六)年五月

處女會退會員寄贈

資料―4

短冊箪笥内に保存されていた茶道具 4 点



Ⅱ　短冊箪笥の墨書文字とその解説

「短冊箪笥」に書かれていた墨書文字を、「太字」で書かれていた通りの「旧漢字」で記します。

★短冊箪笥戸蓋の表・・・・・**抹茶器一式　櫻村處女會**

★短冊箪笥の背面・・・**大正拾五(紀元二五八六)年五月處女會退會員寄贈**

★短冊箪笥戸蓋の裏・・・下表に記します。

目　録	現存 or 紛失、 その他「見たて」や「情報」
一　**風呂先**	紛失
一　**風呂釜**	紛失
一　**敷板**	紛失
一　**前瓦**	紛失
一　**短冊箪笥**　(資料－1)	現存
一　**抹茶碗(夏冬二箇)**	紛失
一　**棗**　(資料－4)	現存　蓋と蓋の合わせ口部分で、**黒の漆塗りの剥がれ落ち**あり
一　**茶杓**　(資料－4)	現存　【竹節部分の黒色模様を景色があるとか見所があるという】
一　**茶筅　二**　(資料－4)	一ヶ現存　茶筅の先が擦り切れていますが今でも使用可
一　**茶巾　二**	紛失
一　**柄杓**　(資料－4)	現存　柄と杓の部分を固定する竹釘が失われバラバラである
一　**水差(壽山)**	紛失　【「寿山」は尾張常滑陶工の銘。良品】
一　**袱紗**(ふくさ)	紛失
一　**蓋置(宣徳)**	紛失　【宣徳銅器の略。中国・明の宣徳年間(1425―35　年)鋳造、以来同種の呼称。良品】
一　**建水(宣徳)**	紛失　【同上の鋳造、良い品】
寄贈者	**山田　よね:**　安正寺先代の妹　**(幹事)**　18 歳位　大正 15 年頃結婚 **坂井　のぶ:**　坊主尾・茨尾の村会議員の娘　**(幹事)**　年齢不詳 **堺　はつの:**　桜町南現当主堺長宏(おさひろ)氏の母　**(幹事)**　21 歳　大正 13 年頃結婚か？ **坂井　千代:**　当時の「造り溜まり屋」坂井重ヱ門氏の娘　**(幹事)**　年齢不詳 **椙野　　久:**　椙は杉の間違い　丸江戸屋の娘で現当主杉野元昭氏の母　**(副会長)**　23 歳　大正 15 年結婚 **伊藤つるゑ:**　伊藤酒造先代幸ヱ門氏の妹　27歳　**(会長)**　生涯独身

Ⅲ　なぜ茶道具を寄贈したのか？

明治以前「茶道」は、武士・僧侶・豪商などの“**男子**が嗜(たしな)むもの”でしたが、日清・日露戦争を背景に経済の飛躍的な発展に伴って一般民衆に広まり、「茶道」の作法・精神は「女性の教養」ともされるようになりました。しかし、「茶道」はまだまだ庶民には遠いものだったようで、「桜村処女会寄贈の茶道具」が発見された 1999 年に実施した聞き取り調査でも、大正 15 年当時、伊藤つるゑ様以外の寄贈者5人は茶道とは無縁であったことが判りました。当時副会長の杉野様は、「大正 15 年には結婚の準備に気を奪われていたのか、「茶道具寄贈」の事は全く記憶にありませんが、会長の伊藤つるゑ様のお宅は、1847 年（弘化 4）創業の酒造りの老舗で、大正時代桜村で唯一の茶室がありました」と証言されています。

全国の処女会を母体とした「女子青年団体の組織化」の訓令が出されたのは大正 15 年 11 月で、その半年前の 5 月に「処女会退会員の茶道具」が（宛先は不明ながら）寄贈されました。寄贈者は前項で示したように桜村処女会の会長・副会長・幹事という重責を担う女子 6 人で、彼女たちはこの 5 月迄には、日本中の処女会がやがて「女子青年団」として再編されるという情報を、新聞や処女会誌または村内の有識者を通して既に掌握していたと考えられます。彼女たち自身が一致協力して築き上げた「自主・自立性の高い桜村処女会の終焉」を非常に残念に思いつつも、その一方で彼女たちはちょうど結婚適齢期に差し掛かり一人また一人と結婚退会の話が持ち上がる時期でもあり、青春時代への決別と将来への一抹の不安と希望が交差した時期でもあったと思います。

そうした女子の中で、当時 27 歳になっていた伊藤つるゑ様は会長として、副会長の杉野様と共に 40 数名の会員を束ね、大正 14 年度敬老会行事を含む処女会事業を推進実行して立派に成就させ、後々まで「しっかり者」という評判が語り継がれるほど並外れて優秀な女性でした。そのような女性が、国が決めた処女会の終焉という大義があったとは言え、結婚退会ではなく、27歳でただ退会するには、何か**“華”**が欲しいと考えるのは今も昔も変わらない**“女心”**です。そこで、桜村で唯一茶室が自宅にあり、茶道の心得のある伊藤様が、**ゆくゆくは茶会を開催できるような桜村女子青年団に発展して欲しい**と願いを込め、更に**桜村処女会の軌跡**を残すことも兼ねて、退会記念として茶道具一式を寄贈する案を処女会の主要メンバー5人（既に結婚退会者も含め）に図り、賛同を得て実現させたのではないかと推測しました。
・・・この時、伊藤様は「機会があれば後輩の**青年女子に茶道を教えたい**」と心に秘めておられた可能性も考えられ、後日後輩の女子青年団員に教える機会は無かったものの、**「戦後の昭和20年代に、伊藤様が男子青年団員にお茶を教えていた」**という次の証言から、恐らくこの推測は当たらずとも遠からずと思います。

【桜町の故石川ひで様（元助産婦）の証言】
戦後、伊藤つるゑさんは、夜、自宅の茶室で男子青年団員に茶の湯を教えていました。昭和4年生まれの息子が、青年団で伊藤さんにお茶を習っていて、「畳の縁を踏んで、注意された。」と言っていたのを記憶しています。

― 終 ―